《早春賦慕情》

三十二歳になったら死のう―女優志願の女が心にきめたことだったが、その年齢になって感じたことは…

天の春繭（はるまゆ）

平　龍生

1

窓の外に写る枇杷の木は、隣家の塀から枝が外に張り出している。

実をつける頃には鬱陶しいほどに黝（くろ）ずんだ葉を茂らせるのだが、いまは枯れ枝だけが突き立ち寒々しい。

真名木綾子は昼前に起きだし、まず二階の部屋の窓から外を見た。

部屋の寒さもあって、体をぶるんと一つふるわせた。そのあとに見た眼下の光景である。

まだ、二月の季節、どこかに寒さの感じがあっても不思議ではない。

テレビをつけたら、天気予報の時間で、笑顔

だけが売り物の女のアナウンサーが、春の跫音（あしおと）が近くに来ていると告げ『早春賦の唄』が聞こえてきそうですね、と結んだ。

（春の跫音が聞こえるって？何を言っているのかしら？だいいち、そんな常套句を使っちゃって、恥ずかしくないの。もう少し、自分のことばしゃべったらどうなのよ）

女のアナウンサーに反発してみせ、すぐに、綾子はテレビを消した。

昨夜は深酒をしたので、綾子は鏡の前に立つのが怖かった。不摂生をすると、近頃は、肌の荒れが目立つ。

「どう？真名木綾子、わたし、きのうで三十二歳、早春賦ってことばの響きはいいけど、わたしが頭の中で考えていることは決して詩的なことでもなんでもないわ。ほんとうに、あなた、三十二歳になったのよ。死ねる？」

洗面台の前に立ちと、綾子は、もう一度、自分に決心を強いた。

大体が独り言をいうのが好きで、綾子自身はこんな会話を鏡の向こうの自分に何度も語り掛けてきた。近頃は洗面台の鏡はあまり磨いたことがない。ぴかぴかに磨いた鏡に真正面から対する勇気が失せていた。

綾子は出掛ける準備をするために、髪を梳いた。髪をアップにし、額を出すと、刺繍織りの赤いバンダナで乱れた髪をまとめ上げた。細面で、小鼻の割りには、二重瞼の眼が大きい

ので顔の造作を派手に見せた。
右の頬にだけにあるえくぼは、表情によっては可愛いらしさも表す。
が、やや、下唇は厚く肉感的に見えるので何気なく投げるその視線とともに、男心を刺激する印象も綾子にはあるようだった。
綾子は自分では少し、わたしは淫蕩な女のほうかしらなどと考えている。
それなりの男遍歴が綾子にはあったからである。定職を持たない身でもなんとなく生きているのは、暮らしに困ると男たちに擦り寄る特技のようなものが、綾子にはあったからである。もちろん、その分、肉体を切り売りしているようなところはあった。
この日は、退屈な午後の過ごし方を綾子は見つけた。
ことあと、綾子はかっての恋人、来宮良介の妻、由香と会う段取りをつけた。
良介と由香は新婚生活半年と言ったところ、いまが、幸せの絶頂期のはずだった。
由香は世田谷区経堂の高級住宅街のマンションの住人である。それに、良介は父親の歯科医院を手伝う歯科医、世間的に言えば、由香は人の羨む結婚をしたことになる。
「ほんとうはね。良介に用事があるんだけど、いまさらね。わたしたち、前は、男と女の関係にあったのよ。あなた、知りたくないことだろうけど、どうしても、わたし、話しておかなくちゃらない

ことがあるの。大丈夫、復縁を迫る話なんかじゃないんだから」
綾子は電話に出た由香に自分の名を告げてから、ひと先ず、話をやんわりと持ち掛けた。
「どうして、今頃、そんな話しを持ち出すんですか？」
初めは少し怯（ひる）んだふうの声を出した由香だったが、話を切り返してきた。
二、三、やり取りがあったが、結局、電話では埒（らち）が明くことではないので、由香は綾子に会うことを承諾した。
由香が指定した西新宿の高層ビル郡の一角にあるカフェ・バーで二人は会うことになった。
初対面になる由香のために、綾子は自分を見分ける法を伝えておいた。
赤いバンダナの目印と、少し、右足を引き擦って歩くのが癖のことを由香に教えた。
カフェ・バーは高層ビルの地階にあった。
カウンター席と、円卓型テーブルの席があり、全体のンテリアは茶系統の色調でまとめられているの、落ち着きがあった。
隅っこの円卓席の一つに、由香はぽつんと一人、座っていた。
由香の顔写真は前に良介から見せられたことがあったので、綾子は 見知っている。
由香はシナモン・ティを注文していたが、手をつけていなかった。
（シナモン・ティがお好みか）

綾子の呟きは相手を小ばかにしたものだった。綾子は近くに寄ると、由香を一瞥（いちべつ）した。近づくとき、わざと、右足を引き擦ってみせた。綾子が座り、コーヒーを注文したあと、
「あの、わたし、平気ですから、話はちゃんと、伺います」
と、由香は相手になめられまいとしてか、しっかりした口調で綾子に対してきた。
由香は若妻というよりは、まだ、お嬢さん顔の女子大生のように見えた。
肩まであるある髪はソバージュふうの仕上げで、ふんわりとしている。
美人というよりは、可愛いさのある顔で、どこか、稚なさも残っていた。
「あなたも良介の赤ちゃんを生むの？わたしも良介の子供を身ごもったことがあるのよ」
綾子は最初の一言で由香を黙らせた。
さらに、ことばを重ねる。
「生きているような、死んでいるような、そうね。良介の心の中では、もうとっくに死んでいるはずだけど、わたしの心の中ではまだ生きているってことかしら？」
由香のまばたきしない眼が、それでも、何とか、綾子を見返していた。
テーブルに置かれたシナモン・ティは半ば冷え、香りも失せつつあった。白い陶磁器だけが存在感を際立たせている。
「人間の鼻だってフレーバーは嗅ぐ内に鈍磨（ど

んま）するっていうわ。あなた、ティ、召し上がれば。人の記憶も香りのようにさせてしまうのならいいのに。お生憎さまよね」
「良介が何をしたんですか？ちゃんと聞かせて下さい」
やっと、由香は自分を取り戻し、詰問口調で問うた。
「長い物語だけど、あなたはあくまで第三者、刺激的なところだけ教えて上げる。子供は良介に似た女の子、ほら、女の子は男親に似るって言うでしょう。でも安心して。その子は名もなく死んだのよ」
綾子が注文したコーヒーが運ばれてきた。
ストレートで綾子は口をつけた。
しばしの沈黙の間だったが、由香はそんな仕種を見ていず、視線を宙に泳がせた。
「ね。ショック？でもあなた、わたしに感謝しなくちゃ。別に、わたし、良介につきまとうわけじゃなし、それに、性の手ほどきは年上のわたしがして上げたのよ。あれやこれやと。どう？良介、あなたの耳たぶにもそっと舌を入れたりしてぇ」
「そんなこと知りません」
由香はムキになり、抗弁した。語気の強い分だけ、寝物語りの一部を覗き見たような気に綾子はなった。
「悔しい？でも、みんな昔のこと、忘れてあげなくちゃァ」
「何を言っているんですか？こんなところにわた

しを呼び出して」
「良介のこと好き?心の底から」
綾子は由香をはぐらかし、肩をすくめてみせた。綾子の問いには由香は答えなかった。
「ね。真底、好きかって訊いているの。わたが」
今度は、答えを強制した。
綾子は唇の端を舐めた。
「好きだから結婚したんです。そんなこと、訊かないで下さい」
「よかったァ。良介もこれで幸せね」
「あの、良介、良介って呼び捨てにしないで下さい」
「そりゃそうね。昔の男のこと、良介でもないわ。カレって呼ぶか。子供のことの他に、もう一つ、カレに貸しがあるの。わたし、キズモノ、そのこともあなたに憶えていて欲しいと思って」
「…そんな、昔のことでしょう」
「ばかね。三十面下げた女が、ふつうのことで、キズモノなんて言うと思う?勘違いしないでよ」
組んでいた膝をほどくと、綾子は右足のパンプスを脱いだ。下半身はコットンパンツ姿だったので、短いソックスだけを下に履いていた。
一度、綾子は由香のほうに向き直り、
「ね。あなた、愛の証しに好きになった男が、お前の体の一部を切り取って、おれに捧げろって言ったら、あなた、出来る?」
何気ないふうに言ってのけた。
意味を解（げ）しかねて由香はただ、下唇を噛

み、綾子を下から掬（すく）い取るようにし見た。ほんとうに、戸惑ったふうの顔つきになった。
「わたしはね。良介を。いえ、カレって言わなくちゃいけなかったんだ。カレがわたしの愛を疑ったことがあったから、愛の証しに、カレにね。わたしの足の拇指（おやゆび）を捧げたことがあったの。あなた、信じる？」
綾子は、鼻をうごめかせてみせ、由香を見下した。由香は綾子とは視線を合わせず、ふんわりした髪に手をやり、無意識のうちに指先に搦（から）めてみせた。
息も詰めていた。
「こんなところじゃなんだけど、わたしの、傷跡、見る？」
微かに、由香は首を振ったが、綾子は由香に選択を求めのではなかった。
綾子は前かがみに体を折り、右足のソックスを足先から抜いた。
その裸の足先に、由香はちらと視線を投げた。
拇指の爪の部分はなく、先端の三分の二ほどが切断されていた。
肉は丸まっていて、いまは、痛々しい感じはない。由香は、すぐさまのこと、視線を逸らした。
「…もう。いいです」
「そうね。見世物じゃないんだから」
綾子は大げさな仕種で、肩をすくめてみせた。
のろのろした動作で、元通り、ソックスを履き、パンプスに足を突っ込んだ。

「カレに恨みは何もないの。あなたにもよ。二人はどうしていまこうして会っているのか、それも余り意味はないことなのかも知れないわ。強いて意味を求めれば、きのうがわたし の三十二歳の誕生日、あなたの若さが羨ましいわ。今日のことは、みんな、わたしの気まぐれ、つまんないことに付き合せてごめんな さいね。あなたとはもう二度と会わないわ。カレともよ。ここのお勘定払ってくれるだけでいい。わたしお金もない人だから。それで、みんな、無罪放免ってことにして上げる」

そう言うと、綾子はカップに残ったいたコーヒーを飲み干し、一呼吸おいてから、席を立った。

由香は呆気にとられたように、綾子の一挙手一投足を、まじまじと見ていた。

小脇にバッグを抱え、綾子は入り口のほうに向かって歩いて行った。

少し右足を引き擦っている。足先に力が入らない分だけ、歩くとき、前かがみになった。

由香は、その綾子の不自由そうな歩様だけを、このとき、眼に止めていた。

2

京都の北部にある京北市は、北山杉の産地として知られる。綾子の生まれ育った地は自然の風気に恵まれていた。

小さく開けた町は、山に囲まれた盆地であった。京北の地は、三分の一ほどが、植林地で、綾子は学校

に通う道々で、いつも、真っ直ぐに立つ北山杉を眼にしてきた。
北山杉は立っているその姿が美しい。
下枝を落とされ、間引きされた杉はどこの山でも、行儀よく、真っ直ぐに立っている。原木が出せるのは、植林してから二、三十年あとのことで、人間なら成人している年合いとなる。
綾子の父、重太郎は、親から引き継ぎ、この京北の村里で、琴糸つくりの仕事に就（つ）いていた。三代目に当たる。
いまは、琴糸も、ナイロン製やテトロン製の人造糸が幅を利かせているが、重太郎は昔通りの絹糸で琴の糸を作った。
絹の糸を使うのは、生田流、山田流の家元たちで、それだけに、糸一本に賭ける重太郎の執念には凄まじいものがあった。
原料の糸から注文がつく。
重太郎が用いるのは、琵琶湖の北の村に産する上物の春繭（はるご）で、重太郎は自らも養蚕（ようさん）地に足を向けた。
仕事には厳しいが、やさしさも、人一倍持ち合わせた父親で、綾子は小学校高学年になるまで、何度か、父親に連れられて、湖北の村、木之本（きのもと）の里を訪れた。
母親の秋子が病弱で、入退院をくり返している身だったので、その分、重太郎は一人娘を不憫がって、木之本に同道したりしたのだった。
生来、無口な父親だったが繭のことになると、

綾子に話しするときだけは能弁になった。
琴糸に用いるのは最上等の春繭で、桑の若葉で育ち、春半ば頃に糸を紡ぎ出す。
高屋根の養蚕小屋の中二階が、大体、蚕の飼われている場所だった。
板壁には何ケ所か、通風用の窓があり、春の風を吹き入れるために、開き窓はつっかいの棒が渡されていたりする。
中二階に上がるための板梯子（はしご）を上がると、蚕棚があり、桑の葉を食（は）んでいる蚕の姿を見ることが出来た。
ざわざわと、蚕たちが、桑の葉を蚕食（さんしょく）するその音が、小さい綾子の耳には不気味なものに思えたりもした。
父親はいちばん風通しのいい場所の奥の蚕座に綾子を連れて行き、よく、おかいこさんの話を綾子に言って聞かせた。
蚕は四回脱皮するが、それを一齢期と数え、最終の脱皮が終わったあと、蚕は第五齢期となる。この頃になると、もう、桑の葉は食べず、体が透明になって蚕座の上をただ這い回る。
動きものろくなる。
これは熟蚕（じょくこ）と言い、やがて、熟蚕はわらなどを束ねて作ったすだれ状の簇（まぶし）中に入れられ、繭を紡ぐようになる。
父親が話したことで、いまも、綾子の頭の中に残っているのは、大抵は、この熟蚕を前にしての話であった。

「おかいこさんはこの世に糸を紡いで、そいで一生をおえるのや。見てみい。白くて美しい糸を紡いでくれるおかいこさんをわしらは、ヒメコサマというてる。いちばんええ糸を紡いでくれるのや。四回生まれ変わって天に昇る。蝶々みたいにきれいな羽は広げんが、神さまが下さった人間の手が、きれいな着物（べべ）や、ほてから、わしがつくり出す琴の糸なんかに、姿を変えて、みんなを楽しませてくれるのや。神さんかて喜んではるやろ」

蚕に感謝の気持ちを述べるときの父親は、いつも、綾子の小さな手をぎゅっと握り締めていた。

おかっぱ頭の綾子は父親の顔を下から仰ぎ見、そして、こっくりをする。

「わしの琴糸は一本撚（よ）るのに、この春繭が三千二百四十粒もいる。これはたいそうなことや。そやから粗末に扱おうてはならん。春繭は神さんが下されたもんや。琴の糸になったら天の調べが奏でられる。わしの仕事はこれは天職や。よう、憶えとき、このわしの手は神さんの手やと思うてる。お前かて、大きゅうなったら、琴の糸を爪弾くようになるやもしれん。わしの作った琴糸で、琴を弾くときは、お前かて、天の調べが奏でられるのやで」

何度も、綾子はこの父親のことばを聞かされた。琴糸を仕上げるのに、いちばん、適しているのは、乾期の一月から三月で、寒い季節なのに、父親の仕事場には、一切、火の気はなかった。

それには、ほこり一つ立ててはならず、綾子は一度も、琴の糸の張りめぐらされた父親の仕事場に入ったことはない。

この季節は、多くは外は雪で、京の北山の地では豪雪に見舞われることも多かった。

母親が家にいないことが多かったのと、人里を離れていたので、綾子は一人で遊ぶ機会が多かった。雪の降る日などに、よく、窓越しに、父親の仕事場を覗き見た。

背伸びをし、ガラス戸に頬をくっつけて、いつまでも、父親の仕事ぶりを眺めていた。

父親の吐く白い息だけが、何度も、仕事場を行き来した。

一日に、何キロも歩くほどの忙しさで、横に張られた三十メートルほどの糸は、中廊下のような板床の両側におよそ二百本余りも同時に張り巡らされていた。

糸は黄褐色だったが、時に、春陽が射し込むときなど、綾子には金色に見えた。

四、五本合わせて絹糸を張り、木製のおもり駒を吊るして、掌で駒を回転させながら、琴糸は撚られて行く。

出来た糸をさらに、四本合わせて撚り、これを強く張って乾燥させ、あとは、綿糸にひたして米の糊（のり）を糸の面に引く。

この工程の前に、糸に弾力を持たせるために熱処理もする。綾子は教えられたわけではないが、一応の琴糸づくりの工程は頭に入っていた。

母親の秋子が京都市内の大学病院で亡くなったのは、綾子が七歳のときだった。
先天性の溶血性貧血病という難病で、綾子の母親は三十二歳の若さで死んだ。
赤血球の異常が原因の病気で、ちょうど、父親の仕事がいちばん忙しい春先の二月の中頃に母親の容態は急変した。
抗体の力が弱まる病気なので、感染症を併発し、結局は肺炎がその死因となった。
綾子には母親との楽しい思い出は余りない。
赤ん坊の頃のことは覚えていず、小学校に上がる頃は、もう、母親は入退院を繰り返していた。
一つだけ、いまも綾子の脳裏にあるのは、母親の日本美人ふうのほっそりとした顔立ちと、透けた顔色、そして、着物姿だった。
命の短いことを知ってか、父親は、上物の着物を母親に着せ、飾り物のようにわが妻を扱った。
家事は、一人だけいた弟子がやった。
母親の想い出といえば、夜、添い寝をされ、やさしく髪を撫でられたことぐらいである。
それも、小さいときに限られた。母親の弔（とむら）いのとき、父親が綾子に言って聞かせたことも、綾子にとっては母親の想い出の一つになるのかも知れない。
「あれは、ヒメコサマや。なあ、人間は脱皮はけんけど、かあちゃんはヒメコサマみたいに、きれいな糸を自分で紡（つむ）いでな。そいできれいな衣（べべ）を身につけて、天に翔んでってしも

うたのや。よう、覚えとき、綾子という名はかあちゃんがつけてくれたのや。綾とは着物のことや。かあちゃんはな、お前がきれいなべべをこの世でまとうてくれるよう願いを込めて、綾子とつけたのや」

父が綾子に言って聞かせたことどもであった。

そう、綾子に語ってくれた重太郎は、綾子が高校を卒業した年の春、仕事場で倒れ硬マク下出血で全身不随となり、病院に入ったのち春を待たずに死んだ。

綾子は残った親戚縁者の反対を押し切り、一年浪人したあと、単身上京し、四年制女子大の演劇科に入った。

表向きは、教師になると回りを納得させてのことだったが、高校の頃から演劇部に籍をおき、熱を上げていたので、上京して女優になるチャンスをつかみたいというのがその本心だった。

高校の先輩、東京の大学に入り、劇団活動をしていた男性を頼った。

初恋の相手で初体験もこの男性だった。

だが、二人の仲は長続きはせず、お互い、別の異性が好きになって、何となく別れた。

女優になる夢を描いて東京暮らしをするようになてから十余年が経った。

先輩の初恋相手の男性はテレビなどでも顔が売れるようになり、一応の志を果たしていたが、綾子のほうはいつの間にか身を持ち崩していた。

父親の死でわずかばかりの遺産を受け継いだが

、せいぜい四年間の学費と生活費程度のことで演劇活動を続けていくには足りなかった。
ミニコミ誌の編集の手伝いから、倉庫会社の在庫チェック係、印刷会社では夜間作業の高賃金に引かれて働きもした。手っ取り早く金になるヌードモデルもやり、そして、貸衣装を着て、パーティなどの出張コンパニオンにも身を変えた。
その間、何人もの男たちとの出会いがあり、そして、別れがあった。男たちとは、いっとき楽しさを持ったが、生活が荒むにつれて、空しさの情ばかりが増幅した。いつか、綾子は、心触れ合う前に、男たちとは自分のほうから距離をおくタイプの人間になっていた。

3

東京で女が一人、十年余りも暮らせば、たぶんに、したたかになる。
綾子は小さな劇団の経営するプロダクションにも身を置いた。
その間に、何度か、ある俳優養成所のオーディションも受けた。
いわゆるとうが立つというヤツで「きみには生活臭が身についている」と有名なその劇団の老年の男優に言われ、次の年からは綾子はもうその劇団のオーディションには顔を出さなくなった。
たしかに、その頃はレストラン経営者の中年男の愛人のような暮らしをしていた。金の援助を受

けているのは、自分が女優になるためで、それから、その中年男に愛の気持ちもあったので自分では割り切ったつもりだったが、このふしだらさをその老年の男優に指摘されたような気になり、女優になる決心がつきかねた。
結果は、愛人の中年男に八ッあたりをし、このときは、この男との縁をすっぱり切った。
次に、その反動か、夢を胸に秘めている男たちが好きになり、ルポライターや、カメラマン、ミュージシャンを目指している男などと何人か付き合った。
案外とみんな口先ばかりで自由業を口にすることがファッションだと、心得ている男などもいて、この連中にも綾子は失望した。
馬鹿な男共自分にも綾子は腹を立てた。
中年男に肉体を提供しても、まだ夢を紡いでいる自分のほうが、余程、純粋だと、綾子は何人かの若い男たちをとりかえたあとに思った。
いつの頃からか、綾子は、春先になると、自分が鬱の状態になることに気付いた。
それは、父親と母親の命日が、この時期と重なっていたこととも関係があると、綾子は考えた。
上京して以来、二度、父母の墓参に京都には帰った。が、それも父親の三回忌と七回忌に親戚の者からせつつかれて帰参しただけで、それ以後は西のほうに足は向けていない。
その代わり、梅の花がほころび始めると、綾子は東京の空の下で、父母の命日のことを思い、殊

勝にも黄水仙の花を買って来て、自の部屋に飾ったりした。黄水仙は春先になると、家の庭先で花を咲かせたのだった。

そのことが、どうも鬱症状と関係があるのではと考え始めた頃、綾子は自分の越しの数を、数えるようになった。

夜、遅くまで酒を飲んだり、男友達のところに、転がり込んり、綾子は自由気ままに暮らしたが、二十七歳の誕生日は誰も祝ってくれず、綾子は一人で夜を過ごした。

何か、きのうのまでは、自分の回りに、男たちが群れているような気がしていたのに、この日を境に、綾子は自分の年齢というものを、はっきりと意識するようになった。

そのとき、頭に浮かんだのが、わたしは生まれ損ない、そして、自分のすすむべき道を誤ったということだった。

自分に両親もなく、頼れる親戚縁者もいないことに気付き、漠然とではあったが、自分の前途に不安も持った。

二十七歳で女優の道などすでにない。

そのことは、三、四年前に一度あきらめかけたことである。小劇団経営のプロダクションにいた連中は転進してCMナレーターになったり、あるいは、女性の場合はさっさと金のありそうな男を見つけて結婚し、身の保全を図った者もいた。

それで、自分の夢を売ったのだ。

結局は、綾子も「女優になってみせる」と広言

した来ただけで、時折り、行き付けのバーで会う元ルポライターや、カメラマン志望の連中と、自分も少しも違っていないことに気付いた。
それで…綾子は二十七歳の自分の誕生日に自らに足枷、手枷を嵌めた。
(わたしが三十二歳になって、自分に納得出来る人間になっていなかつたら、この世からおさらばしちゃおう)
深刻ぶって考えたのではない。
その齢になっても自堕落に生きている自分の姿なんて、見たくもないと自省の気持ちも込めて、綾子は呟いたのであった。
よくよく考えたら、三十二歳という齢に一線を劃(かく)したのは、母親の秋子の短い一生と重なっているようだった。
いつも、瞼の裏に残っている母親の姿はどこか儚(はかな)げで、そして、美しかった。まるで、何度か、脱皮したあとの蚕のように、透けた肌色をしていたように思う。
綾子は自分の姿も美しくありたいと願った。
考えてみれば、舞台に立ち、スポットライト を浴びたいと考えたのは、人間には不可能な 脱皮という変わり身の行為を、わが力で演じ てみたいと思考してのことではなかったか。
どんな変身ぶりを遂げるのかー自分の好きな性格も、嫌いな性格も、あるいは美しさも 醜さも、スポットライトの眩しさにさらされれば変わることが出来るのではないかと思った。

それが、例え仮の舞台であれ、年老いて行く人間の一生でさえ、女優業というのは、美化して表現することが可能になるのだった。
それが…もうそんな夢は叶いそうになかった。
二十七歳、もう若いなどとは誰も言ってくれず、これから実現しようという夢のことを熱っぽく語る相手も、もう、綾子の身近にはいなかった。
それからもう一つ、綾子は悪い夢想を自分のために用意した。
悲劇のドラマの主人公になったつもりで、自分なりにドラマを創って死んで見せる自分も悪くはないなと考えたのだ。
自分の体には母親と同じ悪い血が流れていて、やがて、体色が透けて来て、わたしは一人、ひっそりと死ぬ―悪い発想ではなかった。
医学書を調べてみると、溶血性貧血症は、多くは遺伝性のものだと考えられると記されていた。
綾子自身はいまのところ、体調が異常があるわけではなかったが、悪い血がわたしの体内にも流れていると考えるのは、綾子は嫌いなほうではなかった。
(いえ、悪い血がもう騒いでいるのよ)
綾子は自分だけ楽しむふうの台詞を、このとき、口にした。

4

来宮良介と真名木綾子が知り合ったきっかけは

、綾子の女友達の家でのパーティに良介も招かれて来ていたからだった。
当時は、まだ、良介はインターンの身で、プレイボーイぶりをいかんなく発揮し、乗りつけた外車にも女友達が二人もいた。
綾子の良介に対する第一印象は、大学時代の初恋相手の男性に良介が似ているということだった。それで、まず、良介に綾子は惹かれた。
それから、良介につきまとう若い女たちに対する対抗心、いい気になっている良介をからかってやりたいという思いもあった。
この日は、招待主の女友達の二十五歳の誕生日だったので、お祝いにシャンパンが用意されていた。シャンパングラスを傾けながら、綾子は良介とはことばの遊びをした。
「ね。食べたいぐらい可愛いってことばがあるでしょ。あれ、性愛表現の一つで、男は食べたい。女は食べられたいんだって。愛の行為って食事とどこか似通っているって言うわよ。何だか、微妙な表現よね」
「ぼくは食べられたいほうですよ」
良介は邪気のないしゃべり方で答えた。
「そういうので男の人の性格が分かるのよ。受け身が好きなタイプなんだぁ」
綾子は良介を初めにからかった。
それから二人の会話は際どくすすみ、男と女の愛の部分は、お互い、口にするには余り美しいものではないことにまで話は進展した。

話は、元に戻り、食べるという性的行為が、愛欲の原衝動（リビドー）ということで、二人の意見は一致をみた綾子には、良介を取り巻く若い女たちを排除したいというもあった。
年下の男と体を接することが、自分に取っていまは切実な欲求のようにも思えた。
年下の男に身を任せたからって、その分、若くなれるわけでもなかったのだが…。
良介の一人暮らしの優雅な造りの高級マンションに、綾子が招かれたのは、一週間後のことであった。
世田谷経堂にあるこのマンションは、いま、新婚中の愛の棲家になっていて、良介と由香が新生活を始めていた。
綾子は二つ年上だったが、悪ぶってみせ、良介に性の手ほどきをしてやる約束で迎えられた。
年上の女に身を任せたいという思いは大抵の男にはあるもので、特に、良家育ちの良介は、綾子とそのような関係になることで、若者特有の悪者ぶった気風を、いっぱしに、体験する気になったようであった。
綾子の“食べる行為”は、男性が女性にほどこすようなやさしさが込められていたので、良介は一時期、すっかり、綾子の虜になった。
綾子が由香を、新宿のカフェ・バーに呼び出し“耳たぶを食べる行為”のことを口にしたのも、このときの良介と綾子とのベッドでの絡みの結果、生まれた文句だった。

良介は年上の女に可愛いがられたことで、悦楽の深みに、いっとき、嵌りこんだのだ綾とのことは、直ぐに、親に知れた。
父親の経営する歯科医院は、マンションともそれほど離れていず、住居も一緒だったことから、良介の母親が出入りする機会も多く、綾子も良介の母親とは顔を合わせた。
その頃は、良介のほうが綾子に夢中になっていた。綾子との仲を親に注意されたこともあって、良介は余計に綾子にのぼせ上がっていたのであった。綾子は良介に結婚を申し込まれた。
が、きっぱりと、綾子は断った。
生来、結婚願望がなかったせいもあるが、暮らしには恵まれるだけの、これからの生活には、どこか、自分自身の自由がないように思えた。
すでに、女優になることは半ばあきらめていたが、結婚してしまうと、その夢を捨てることになり、すべての意味で自分に妥協を強いる結果になりそうで、怖かった。
これで、自分の一生を締めくくってしまうー一人の男のためだけに、自分の夢は渡せないという思いも綾子には強くあった。
綾子にのぼせていた良介だったが、取り乱しはしなかった。
「抱きたいときはまた抱かせて上げるからね」
と、綾子は告げ、二人はずっと自由な関係でいればいいと、良介を納得させた。それからも、回数は減ったが二人は会った。

綾子は良介の相談係にもなり、良介が持って来た見合い写真の品定めに一役買ったこともある。その中の一枚に、由香の写真もあり、綾子としては「おすすめ品よ」などと、余裕のありそうなことも言った。

が、ある日のこと、綾子は妊娠していることを知った。体調が勝れず、産科医院に行ったら三ヶ月の身重だと告げられた。

お腹の中の子供は良介との間に出来た子とは断定出来なかった。

綾子は複数の男性と肉体関係を持っていた。

そのへんのところは、良介も薄々とは知っており、痴話喧嘩になったこともある。

このとき、綾子は電話で良介には妊娠の事実にだけを事実を告げ、子供は堕ろすつもりだと言い、そのための費用を、綾子の銀行口座に良介には振り込まさせた。

さすがに、良介もうろたえが、認知役の任を下りられたことにほっとしたようだった。

この時期、同時に、良介と由香との結婚話はすすんでおり、綾子もそのことは知っていた。

綾子は良介に子供を堕ろすと言ったが、その気はなかった。

未婚の母も悪くないと考え始めていたのだる

良介が口座に振り込んだ金は当分の生活資金にする気だった。

三十二歳までにはなんとかしなければ…それは漠然とした決意だったが、綾子は自分は一匹の蚕

で、もしかしたら、白く美しい糸を紡ぎ出すことが出来るかも知れないなどと、まだ、未練がましく考えているふしもあったのだ。
自分のことを、もう何度も脱皮し損ねて、蚕座の箕（す）の子の上をただ這いずり回ってきた醜い虫けらだと思ってきたから、綾子は自分の肉体の一部がまだ美しく化身（けしん）する可能性があるかも知れないと、蚕の脱皮話にかこつけて考えたのだ。
もっとも、子供を産む行為は、女優になる夢を捨てることなのに、綾子はちょっとした感傷的な思いのゆえに、いっとき、こんな定かならぬ思いに身を委ねたのだった。
お腹の中の子供が誰の顔に似ていようと、綾子はこの場合はどうでもよかった。
母性に目覚めている自分に綾子は驚きもした。
体の中に母親から承（う）け継いでいる悪い血が流れているという思いも薄らぎ、もう一人の、生まれ変わりの自分を綾子は待つ気にもなったのだ。
頭のどこかでは、子供は自分の生まれ変わりで、もう一人の自分、そして、その子は間違いなく女で、わたしにそっくりな子、つまりは、その子に女優になる夢を託すなら、一から女優をやりなおすチャンスが、自分にはもう一度与えられと、綾子はそんな夢想を抱いたのだ。
複数の肉体関係を持った男たちーその中に、河合研二というイベント・ディレクターを仕事にし

ている男がいた。
小劇場のプロダクションにはまだ綾子は籍だけはおいており、時には、着物ショーや、デパートのマネキンガールに狩り出されることがあった。
河合とはこれらの仕事を通して知り合った。
どうやら、月数から考えてお腹の中の子供の父親は河合らしいと綾子は推断していた。
が、河合には綾子は妊娠の事実は知らせなかった。微妙な女の心の揺れなどわかる男ではなく、即座に堕ろせとこの男は言うに違いなかった。
まだ、プレイボーイぶっていたい二十七歳、この年下の男の魅力はちょっとしたカーマニアだということだった。
四月の声を聞いたばかりのある夜、二人は河合がハンドルを握るスポーツカータイプのアウディで横浜の海を見に行くことになった。
河合は車と女が趣味の男、いい女を乗せてドライビングするのを楽しむ気構えだった。
どことなく気分が勝れず、綾子は珍しく車酔いをした。これも、悪阻（つわり）の症状のせいかと思ったが綾子はがまんしていた。
高速一号線が込んでいたので、途中で、河合は行き先変更をした。
大井埠頭に至る勝島ランプで降り、東京湾を目指した。いらいら運転は河合の性分には合わない。のろのろ運転から解放された河合は勝島橋を渡り切った場所あたりからアクセルを強く踏み込んで行った。

このへんは人工の埋立地で、道路幅もたっぷりとあり、ドライバーとしては心が逸（はや）るのは当たり前だった。
河合はA級ライセンスを持っていたので、街中でカーレーサーのつもりになった。
数分後のことであった。
アウディは右手から突っ込んで来るバイクを視認し、急ブレーキを掛けた。
湾岸道路の四つ辻のことである。
鋭い軋りの音が地を噛み、アウディは急停車したがバイクはアウディの前部の右扉に前輪を喰い込ませていた。
左ハンドルの外車だから、助手席の綾子に強い衝撃が伝わった。
急停止したアウディも弾みで車体が四十五度ほども横を向いた。
アウディの右扉の下部がへこみ、一部、扉の下端が内側に曲げられた。
綾子は右足に激痛を感じた。扉の下端の破損部分がめり込み、綾子の右足の拇指が挟まれていた。救急車で近くの総合病院に運ばれた。
拇指の先はぐちゃぐちゃに潰れていて、結局、切断のための手術が行われた。
それだけではなかった。
体に伝わったショックの大きさは腹部にも及び、入院中に綾子は流産した。
妊娠三、四ヶ月の時期は、特に気をつけなければならないことは綾子も知っていたが、とつぜん

の交通事故だった。
誰も見舞い客のいない病室で綾子は一人泣いた。三十二歳までに果たしたかった女の大事業が、瞬時にして潰（つい）えていた。
が、綾子が泪を流したのは、ほんの短い間だった。自分が何となく薄汚い暮らしをしてきたような気になり、生まれ変われるものならと考えたのが浅薄な思慮だったことを、改めて、思い知らされた。
女優になる夢？……まさか、望み通りに女の子を産んで、自分の夢をわが子に託すという夢を夢見ていたのでもあるまいと、綾子は自分に言い聞かせた。
（やっぱり、わたしの体には悪い血が流れているのよ。生まれて来るはずだった子供だって、あの遺伝性の血の病いを持って生まれて来たかも知れないし…）
そうやって、綾子は自分にいくつもの言い訳のことばなどを用意し、自分を納得させるよう努めた。これらのことは、三十一歳と数ヵ月の齢を経たある春の日々の出来事で、すでに、花の季節だったが、綾子は花の美しさにも心を奪われることもなく過ごした。

5

また、早春賦ということばがふさわしい季節がめぐって来て、綾子自分の鬱の状態に気づくよう

になった。
来宮良介の妻の由香を呼び出し、良介に責任のあるような作り話を由香に語って聞かせたのも、この鬱の症状とたぶんに関係のあることなのかも知れなかった。
綾子が由香に会った翌日には、もう良介から抗議の電話があった。
身に覚えのないことだから、由香を前に謝って欲しいと綾子は良介に言われた。
二人が関係があったことは良介は由香に認めたが、妊娠の件は、良介は自分ではなかったことにしてくれと綾子に頼み込んだ。
金で解決のつくことなら、応分のものは支払うとも良介は哀願調で告げた。
綾子は金は要らないと断った。
「それじゃ、わたしの気まぐれってことにして上げる。良介、わたしと関係のあったことは奥さんに認めたんだから」
それが、電話での綾子の答えだった。
綾子は、良介と由香の二人に直接会うことに同意した。会う場所はこの前の西新宿の高層ビルの一角にあるカフェ・バーだった。
二人の間には一悶着（ひともんちゃく）あったらしく、良介は消耗し切った顔をしていた。
「まったく、ひどい話さと、良介は座るなり言った。
「そうね。ひどい話よ」
綾子もそのまま良介のことばを受けた。

電話では、綾子は悪役を引き受けることになっていた。由香は黒と白を基調にしたスーツで身を固めていた。絹のブラウスの光沢と、フリルのついた襟ぐり、肌に密着した高価そうな七宝（しっぽう）焼きのペンダントだけが、由香の若さを強調していた。

目つきはやや三白眼気味で、由香は軽蔑の眼差しに、敵意も込めているようだった。

「ね。由香さん。男ならそりゃいろいろあるわよ。何にもない男よりね、いまは何かあった男の人のほうが社会勉強もしているし、人間性も豊かになるし、女の人に対する接し方だってうまいものなのよ。この前は、そのことが言いたかったわけ。来宮良介はすばらしい男性よってことを」

由香は綾子の口元を見ていたが、聞いていないようなふりをした。

前と同じように、シナモンティがテーブルの上にはあり、由香はシナモンのステックで軽くティをまぜ合わせてから、綾子を無視するように一口すすった。

「この前、キミが言ったウソの話、由香に納得のいくよう説明してくれないか」

やはり、電話で打ち合わせしたとおりの筋書きだった。余り、長居はしていたくはないというように良介が進行役になった。

● 「子供がどうとかこうとか。あれはまったくなかったことなの。ね、安心して。わたしはそのときはゴム製品を、必ず男の人には求めるから

、カレとの直接の接触はなしってことよね。女優を目指す者としては当然のことでしょ」
最後の件（くだ）りのところでは、由香は「何が、女優よ」と、綾子のいい気な台詞をあざ笑ったようだった。
「おい。話はもっと事務的にすすめてくれよ。キミのおかしな趣味に、おれ、合わせる気はないんだから」
「はい。はい。わかりました。カレが愛の証しを求めたから足の拇指を切ったって話、あれはわたしの大ウソの作り話、交通事故にたまたま遭ってね。足の先、はさんじゃった。それでプッツンって話。それ以上のことは何もありません」
「頭がよすぎるよ。キミは」
「お芝居がうまいって言ったらぁ。ね、由香さん、わたしだって、自分の所属している小劇団の自主公演に何度か出演していたことはあるのよ。主役はなかったけど、これはウソのようなほんとうの話なの」
「また、夢の押し売りか。そういうポーズで、回りを誑（たぶら）かせて生きているっての、もう、止めたら？夢、夢、夢って、それ鼻につくよ。まあ、それはいいや。そっちのことだから。ガンバッテよ。だが、おれたちはお芝居とは関係なし。そのことを確認するために、二人でこうしてやって来たんだから。ともかく、芝居の続きは現実の世界では止めてしてくれよな」
良介の口調は、きっぱりしたものになっていた

。眉根も吊り上げていた。
「はい、はい。わたし、遊びが過ぎたかな。この上は、ウソつき上手だから、わたし、大ウソ話の小説書きますなんて、その気になるかもよ。三十二歳になってこれじゃね。自分のことは自分でけりをつけるから、安心して。さてと、行くか。わたし、ちょっと旅をして来ようと思っているの。東京を発つときにね。雪でもちらついていたらなぁって思っていたら、何だか、外は寒そう。西のほうから北陸にかけては雪なんでしょう。いい日まわりになったわ。でも、この意味はあなたたちにはわからないでしょうけどね」
綾子のしゃべり口が、また、持ってまわったような言い方になったので、良介が由香を促し、二人は席を立った。
綾子は止めなかった。
さよならとも言わなかった。
(別に、良介が好きだったってわけでもないしね)そう、自分の頭をめぐらせた。
最後の一口をするように、綾子はコーヒーカップを口に持って行き、一気に飲んだ。
仲良く、肩を並べて出で行く二人の姿は、綾子は目では追わなかった。

6

今年の冬は暖冬だったので、やっと、オホーツクの寒気団がやって来て、各地に雪を降らせる気

配があった。綾子は良介と由香と別れたあと、駅のロッカーから旅具をとり出し、小雪が舞うように空に飛び始めた東京駅から一人姿を消した。

新幹線こだま号に乗り、綾子は一路、西に向かった。行き先は米原（まいばら）であった。

岐阜の県境を越える頃から、窓外の風景はおおかた雪野に変わり、窓には雪が降り掛かった。

綾子の目指す米原あたりは豪雪地帯として知られる。綾子はその雪深い地に足を踏み入れる気だった。古里は、京都の北の街だったが、綾子は古里には向かわず、米原で降りると、北陸本線に乗り換えた。

琵琶湖畔寄りに列車は走った。

湖面は凍りついていなかったが、このあたりは、いま、冬のさなかにあるということが、綾子にはよくわかった。

右手の窓外には伊吹山地の冠雪をいただいた山々が望めたので、余計にこの感を深くした。すでに、深い雪に覆われていた。

湖北の町、木之本の駅に着いたのは、午後の三時を半ば回った頃だった。

米原から、木之本は七つ目の駅になる。

綾子は遠い記憶を呼び醒まそうとしていた。

少女の頃、何度か、父親に連れられて、この 鉄路を共にした。

いつもは、春も半ばから終わりのことで、琵琶湖の湖面には春うららかな陽光が走り、そして、水鳥が飛び、漁をする小舟が水平線の彼方にのん

びりと浮いていたりした。
山々は新緑で萌え立ち、時に、春かすみが行く手には掛かったものだった。
綾子は東京で暮らしている間、何度か、少女の頃に父親に連れられて行った木之本の村里を訪ねてみたいと思った。
が、日々の暮らしぶりに、余裕のある時間が持てず、ついつい、今日まで来てしまった。
それも、怠惰（たいだ）な自分の心のせいだといまでは思っている。
木之本の駅は考えていたより小さかった。
少女の頃とは背丈も違うから、当然、綾子の目線の位置も変わっていたのであった。
プラットホームには十センチほどの雪が積もっていた。除雪されている通路を、綾子は危なげな足取りでたどった。
列車が去った行く手を、しばらく、綾子は駅頭に立ち見やった。
白い道で、二本のレールだけが、視野の先には敷き伸べられていた。
その先を追うと、平行線は徐々にすぼまり、ただ一本の鉄路が限りもなく続いているようだった。雪は止んでいたので、視界は閉ざされてはいなかった。
ただ、鈍色（にびいろ）の空が重く垂れ込めているかに見えた。綾子は改札口を出た。
山側の地を目指した。湖側には町が開けていたが、山側は伊吹山地の裾野に当たるので、足を伸ば

すほどに民家の数が減った。
綾子は少女の頃、訪ねた想い出のある家を探すことにした。おぼろな記憶をたどる内に、自分がかって来たことのある道を歩いているのに気づいた。雪景色の中ではあったが、目の前には、大きな川があり、そして橋があった。
その川を望み、橋を渡った記憶が、綾子の脳裏にはっきりと甦った。
冬の時期、桑の葉は育たないから蚕は飼われていない。そのことは綾子は承知していた。
この地に自分が足を踏み入れると、少女時代の自分が見つけ出せそうな気がし、綾子は、いまこうして、一歩、一歩をすすめているのだった。
白い雪野の道を分けて行くと、畑地があり、背の低い桑の木が、すっぽりと、雪をかぶっているのを見つけた。桑畑はあちこちに散在しており、風が吹くと、粉雪があたりには舞った。
さらに歩をすすめると、農道の際の四つ辻に板囲いの小屋におさまったお地蔵さまがあるのを見つけた。
雪は小屋内にも吹き入って いたが、石仏のお顔には雪は掛かっていない。
綾子は、このお地蔵さまにも見覚えがあった。
古い板小屋も昔のままだった。
手を合わせ、拝んだ。
無心のことで、別に願いごとは口にしなかった。
田の堰（せき）に掛かる小さな石橋を渡った。
その先が、父親に連れられて来たことのある養蚕

（ようさん）小屋のある農家だった。
綾子は懐かしい思いで高屋根の養蚕小屋を見た。ほっとした気分になり、しばし、足を止めた。
が、二階家の養蚕小屋は軒が傾き、土壁が一部破れていた。
いまは、打ち捨てられたままになっているらしい。それでも、綾子は小屋のそばまで行き、破れ壁から小屋の中を覗き見た。
冬の午後遅くの時刻のこと、薄暗くて内部はよくは見えなかった。
綾子は冷え冷えとした薄暗闇に対したせいか、寒さを覚えた。
少しは哀しくもなっている。
綾子は旅行バッグに忍ばせていたハーフボトルのウイスキー壜を取り出した。
外壁に身をもたせたまま、口開けすると、綾子は三分の一ほども一気飲みした。
「みんな死んじゃったんだ。自分の身を包む白い糸を紡いでいたあの、透明なヒメコサマもいまはもうこの世にはいないってこと？」
と、綾子はひとりごちた。
蚕小屋の鍵の掛かっていない入り口から中に入った。ひんやりとした土間と、かって、養蚕棚のあった中二階の高場、そして、換気用の通風窓が目に写った。
が、蚕座に昇る板梯子は外されていた。
綾子は夢の糸を紡いだ蚕たちの産床（うぶどこ）に行く手立てを失っていた。

そこは、冷えた暗い空間で長居する場所ではなかった。綾子はその小屋をあとにし、さらに、山側の道に踏み入った。

小さな道がうねっていて、道の両側では熊笹が雪に押し潰されていた。

跛行（はこう）の足を引き擦り、足を止めたところは峠場で、そこは平らな場所だった。

綾子はまたウイスキーをのど奥に流し込んだ。のど元の胃腑（いふ）も灼（や）けて、快い痛さを綾子は感じとった。

両足をだらしなく投げ出した綾子の体は、降り積もった十数センチの雪に半分ほども、埋まっていた。

『一本の琴糸をつくるのに春繭（はるご）が三千二百四十粒もいる…春繭は天の繭というて神さんが下されたもんや…わしのつくった琴糸で琴を弾くときは、お前かて、天の調べが奏でられるのやで…』

さっきまでは、真名木綾子はそんな父親の残したことばを思い浮かべ、白い糸を紡ぐ春蚕（はるこ）が自分の体を暖かく包んでくれるのだという幻想を抱いていた。

自分自身で白い糸を紡ぐために、あの、白く美しい透明体を持った熟蚕（じゅくこ）にならなければとも考えていた。

が、いまは、ただ、綾子は眠くなっており、それにつれて、それらの真っ当な人間としての想いは次第に遠のいて行った。

アルコール分のために、いっとき、体温が上がった。心臓もどきどきしていたが、いつか、綾子の体は冷え始めていた。

美しい天の調べなど、どこからも、聞こえては来なかった。吹雪模様になった風の荒れが、いまは、天の声を、あたり一面にとどけているだけのことだったー。

（了）